樺太植民地農政の中の近代天皇制

——樺太篤農家事業と昭和の大礼の關係を中心にして——

The Modern Imperial Institution of Japan for the Colonial Agricultural Administration of Karafuto: The Relationship between the Exemplary Farmer Campaign of Karafuto and the Ceremony of the Showa Emperor

中山 大將*

Taisho NAKAYAMA

The imperial Constitution of Japan was established in 1889 and this meant that the modern Japanese imperial institution was also established. The imperial institution in this updated form remained influential throughout the Japanese Empire.

In 1928, the Showa Emperor succeeded to the throne and a series of the ceremonies were held to recognize the transition called “Showa-no-Taiei.” Concurrently, in the imperial colony of “Karafuto,” the exemplary farmer campaign was launched by the colonial government of Karafuto.

First, this study clarifies the facts on how the colonial agricultural administration of Karafuto utilized the modern imperial institution through the exemplary farmer campaign for its own particular aims. Second, this study discusses the logic for the linkage between Karafuto farmers and the Emperor within the campaign.

The colonial government needed to use imperial ideology to make farmers of Karafuto adopt the ideal farming style it had planned, which differed from that of mainland Japan. The colonial government exposed the farmers to Imperial linkages via the ceremony of “Showa-no-Taiei,” in which the farmers were honored, and attempted to legitimize these linkages through the campaign.

The logic behind these steps depended on three facts. First, the Showa Emperor toured Karafuto and granted an audience with some of the exemplary farmers when he was the prince. Second, he planted rice on a paddy field in the palace after the demise the Taisho Emperor. Third he made honorable recognition of some of the farmers and used and ate crops dedicated by the farmers at the ceremony of accession, “Showa-no-Taiei.” The colonial government hoped that the farmers and agriculture of Karafuto would become linked with the Emperor and the Empire itself by these facts, and that this linkage would familiarize farmers with an ideology of hard work in order to attain the farming style planned by the colonial government.

1. 課題と方法

大日本帝国憲法が發布され皇室典範も定まった1889年以降、近代日本は「立憲君主制国家」としての道をたどることとなる。現実の政治の流れが欽定憲法制定を経ての議会開設となったことを踏まえれば、近代天皇制が確固たるものとして定置されたのもこの時期とみなすことは可能であろう。事実、その後、この欽定憲法に関して、より民主度の高い解釈や運用をめぐる議論や運動が起きたのであり、そこでの争点はしばしば「天皇」という語が刻まれた憲法の各条項であったというのが、坂野潤治（2008）の論ずるところである。

安丸良夫は、既存の天皇制研究を「連続説」「断絶説」に分け、自身を後者に入れ、「古い伝統の名において国民的アイデンティティを構成し国民国家としての統合を実現することは、近代国民国家の重要な特質のひとつであり、そうしたいわば偽造された構築物として、近代天皇制を対象化して解析する」ことを課題に挙げている（安丸、2001、12頁）。

本稿も近代天皇制に対して同様の観点をとりつつも、その問題関心は些か異なる。その関心は、第一に、農業と近代天皇制とがどのように繋累⁽¹⁾を持ちえたのか、あるいはもち得なかったのか、第二に、植民地政庁がいかに近代天皇制を自分たちの業務に関連付け効果を得ようとしたのかという点にある。国民統合からもう一歩踏み込んだ地点における近代天皇制の姿を明らかにしたいのである。本稿ではこのような関心のための分析対象として、植民地樺太にお

* 京都大学大学院

ける篤農家事業（以下、「樺太篤農家事業」と呼称）をとりあげる。

その理由は、第一に、樺太篤農家事業が昭和天皇の即位の礼、所謂「昭和の大礼」（以下、「大礼」）を大きな契機としている点、第二に、この樺太の篤農家事業の高まりが、他の地域の類似した運動・事業と運動したものではない点に求められる。

本稿の課題は、第一に、樺太農政が樺太篤農家事業を通じて近代天皇制をどのように利用したのかという点を事象レベルで明らかにすることであり、第二の課題は、樺太の篤農家事業において、近代天皇制と農業とのあいだにどのような繋累のロジックが用いられたのか、またそれがなぜなのかを論理レベルで明らかにすることである。

本稿の分析においては、樺太庁刊行物や経済調査などの政策資料、樺太現地で開催された新聞や雑誌などのメディア資料、大礼については内閣局刊行物や官報などを用いる。

2. 近代天皇制における「巡幸啓」と「式典」

大日本帝国憲法は1889年に発布、翌1890年に施行となる。この時期は日本憲政にとって大きな画期となるだけでなく、他の面から見ても大きな画期であったと指摘されている。形式的に見ても、1889年には、教育勅語が発せられ、「御真影」の交付も始まっている。

T. Fujitani (1998) は、B. Anderson (1991) が、「想像の共同体」への帰属意識が誕生するひとつの前提条件として、「出版資本主義」による「同時性」を強調している点をふまえ、1889年の明治憲法発布式以降は、国民統合の手段として天皇が関与するイベントが、それまでの「巡幸 (imperial tour)」から、より近代的な一連の「式典 (national ceremonial)」へと移行する時期にもあたると論じるのである。

しかし、原武史 (2001) は、巡幸を「時代遅れの儀礼様式」(フジタニ、1994、222頁) とするこのFujitaniの見解を批判する。原は明治・大正・昭和の各代の天皇の巡幸啓の事跡を検討し、巡幸啓が1889年以降もなお国民統合の装置として十分に機能していたと述べる。つまり、徳川体制では「将軍が幼少であろうが暗愚であろうがその実像を人々が意識することは全くといってよいほどなかった」(原、2001、218-219頁) のに対して、「明治以降の日本は天皇の存在を国民レベルで位置づけなければならない時代に入った」(原、2001、369頁) のであり、そ

の際に天皇の「身体性」が問われたのである。「身体性」が問われるとは、単に視覚化されるか否かというだけではなく、その個性も天皇との繋累を成り立たせるために問われるということだと本稿は考える。

本稿では、昭和天皇の皇太子期の樺太「行啓」をふまえつつ、「式典」としての大礼の意義を検討する。従って本稿は植民地農政の観点から、「式典」を「対象化して解析する」近代天皇制研究として位置づけられる。なお、本稿で言う「式典」とは具体的に大礼そのものだけでなく関連事業を含む。

3. 内地農政と近代天皇制

原のいう「可視化された帝国」が成立することによって何が起きたのであろうか？巡幸啓の際に沿道に居並ぶ国民的身体が形成されるというだけであらうか？原は「可視化された帝国」の完成を十五年戦争期にしている。日本近代の国民統合をめぐる議論において、しばしばその議論は所謂戦時体制期のナショナリズムの昂揚を説明するためのものとして意義を確保される。しかし、そうした極限的状況の中でしか国民統合ないし近代天皇制の問題は問い得ないのであろうか？本稿が「農業」という「産業」に対象を求めるのは、この問い故である。戦争をしようとしまいと農業は営まれ続けて来たとし、いくであらう。

したがって、これまでの農業・農政・農村史研究が近代天皇制の問題をどのように扱ってきたのかを把握しておく必要がある。本節ではまず内地農民運動史研究⁽²⁾の分野において近代天皇制の問題がどのように扱われていたのかを確認する。

坂根嘉弘 (1990) は、戦後の農民運動史研究には栗原百寿の系譜と宇野経済学の二つの系譜があると述べている。その双方の関心は、主に明治・大正期や農村恐慌時の小作争議の展開にある。しかし、近代天皇制との関連で見れば、明治・大正期の小作争議よりも、日露戦後の地方改良運動や1930年代の農村経済更生運動の中に着目すべき現象が起きている。

不破和彦 (1978) によれば、地方改良運動では「イデオロギー的国民統合策」が重視され、1908年の戊申詔書発布後には「篤行者表彰規定」が設けられ、近代的な行政機構に国民意識をもって取り込まれるような「天皇制・国家主義イデオロギーによって教化訓育」された「村民」の創出が図られた。後述の山崎延吉もこの運動の重要人物であった。

森武磨 (2005) は戦間期農村における下からの農

民運動と上からの農民運動の対抗関係をヘゲモニー論によってとらえ、1933年を画期として農村支配体制が「大正デモクラシー」から「昭和ファシズム」へ転換したとする。そして、そこで大きな契機となるのは農村経済更生運動による農村の再編である。大門正克（1994）は農村経済更生運動の特徴として、第一に農村の経済的組織化、第二に農村の社会的組織化、第三に運動の担い手として広範な村民の指定、第四に前記3点を促進するための「経済更正の精神」の喧伝、を挙げている。この第四点は、経済観念・勤労精神の発揮、郷土意識の発揚、国民精神の高唱という内容を持っていた。第三点では、ある人物群への名指しと動員が行なわれた。それが「中心人物」「中堅人物」である。簡潔に言えば、「中堅人物」とは村内の自作農中堅・自小作上層であり、「中心人物」とは彼らを指導する村内イデオログであり、これらの人物群は国民高等学校（農民道場）などで養成された（森、2005）。この養成を担当した加藤完治や山崎は、山形自治講習所や新風義塾において「愛国的農民」「皇道農業」「天皇帰一」などの観念による農業教育を行っていたイデオログであった（浜田、1977）。このように農村経済更生運動を通じて、近代天皇制は内地農村に入り込まんとした。

さて、これらの人物群は「村民」「中心人物」「中堅人物」と名指されたのであり、本稿が直接関心を持つ「篤農家」と名指されたのではなかった。この「篤農家」あるいは「老農」という名指しに関心を持ったのは、内地農民教育史の分野である。

赤司政雄（1973）によれば、「篤農家」という言葉が公式な形で現われたのは、小作争議が激化する傾向にあった明治末から大正期にかけての時期⁽³⁾であった。前述の山崎が愛知県農会主催の全国篤農家懇談会を1910年に開催したほか、各地の府県農会も地主篤農家大会などを開催するようになった。これらの場における「篤農家」とは自作農が中心で、かつての老農のような技術指導者ではなく地主・小作関係の調停者として位置づけられた⁽⁴⁾。

以上の如く内地農民運動史・農民教育史には二種類の名指された人物群がいた。ひとつは「村民」「中心人物」「中堅人物」であり、もうひとつは「老農」「篤農」である。本稿では、すでに農業を通じてある程度の実績を有するごく少数の有力な人物群である後者を「既存人物」、これから育成されるべき対象とされた各農村内における各階層内の若手や階層の代表者、ないしは国民化の対象となった人物群である前者を「育成人物」と呼ぶ。しかしいづれにしろ、樺

太篤農家事業の契機を1928年の大礼におくのであれば、時期的な連動性が認められず、それが樺太農政の独自の活動であったと考えることができるのである。

4. 植民地農政と近代天皇制

樺太の近代天皇制を問う前に、他の植民地、特に朝鮮での近代天皇制を確認しておく⁽⁵⁾。

植民地朝鮮の支配イデオロギーには段階的変遷が認められるものの、一貫して朝鮮においては異民族支配のイデオロギーの中核に近代天皇制は取り込まれていた（朴、2003）。同様のことは台湾についても駒込（1993）や若林（1992）によって指摘されている。

さて、次に植民地農政と近代天皇制の繋累および「篤農家」という語の使われ方について確認する。朝鮮植民地農政において、1910年代に「篤農家」という言葉が見られる。そこで名指された朝鮮農民とは、朝鮮農政の提示する農事改良メニューを熱心に行う在村耕作地主であった（松本、1998）。1910年代には地主会も組織されていたが、官製団体であり活動は有形無実であった。しかし、1919年の三・一運動を機に系統農会の設立準備が進められ、1926年には朝鮮の系統農会が成立されることとなる。この系統農会が構成員を全農民に広げた一方で、地主のみを構成員にしぼった「地主懇談会」も新たに組織された。朝鮮農政と朝鮮人地主が手を結ぶことにより、日本-朝鮮間の民族支配対立が、地主-小作間の階級支配対立という形にすり替えられようとした。また、この「地主懇談会」の名称は実際には様々で「篤農家懇談会」という名称も見られた（堀、1976）。これは1920年代の朝鮮農政においても、「篤農家」とは地主層を対象とする言葉だという1910年代の認識が引き継がれていたことの証左であろう。しかし、その一方で、1920年代には反日本帝国主義的な性格を持つ小作人組合も各地で結成されるようになった（大和、1982）。

1930年代には1929・30年の農業恐慌による朝鮮農村の疲弊を解決すべく「農村振興運動」が起こされた。しかし、そこで目指されたのは地主-小作関係の改善ではなく自力更生という道であった。富田晶子によれば、「準戦時下の農村振興運動は『皇民化』の名による戦争動員体制形成への布石」（富田、1981b、96頁）であり、「総督府は『自力更生』の諸矛盾に対処すべく、ファッショ的イデオロギー注入をはかっていく」（富田、1981a、166頁）こととなっ

た。その「イデオロギー注入」の対象となったのが、「中堅人物」と呼ばれた人物群であった。朝鮮農政は従来、農村支配を旧来の在地両班層ではなく中間層としての新興地主層に担わせようとしていたが、この段になってその役割を朝鮮農政が直接育成した「中堅人物」に期待するようになったのである⁽⁶⁾。前述の山崎はこの農村振興運動においても起用されており、特に1935年の「心田開発」政策以降は内地の農村経済更生運動同様に、「農民道」「皇国農民」「天皇帰一」といった観念が教え込まれ、朝鮮の農村に神道祭祀を導入することさえ試みられた(青野, 1991)。

以上の内地および植民地朝鮮の農民運動史・農民教育史から次のことが指摘できよう。第一に、既存人物に用いられる「篤農家」「老農」といった名指しに対して、育成人物に対しては「村民」「中堅人物」「中心人物」といった名指しが用いられた。第二に、近代天皇制が関連するのは、後者における天皇制イデオロギー教育においてである。すなわち各戦後・戦時体制に対応するための「村民」「皇国農民」の養成が図られた。第三に、この後者は農村社会の再編の一環として位置づけられていた。内地においては地主-小作階級支配関係、朝鮮においてはこれにさらに日本-朝鮮民族支配関係がその基底にある。ただし、これらの緊張関係を抜本的に解消することが目指されたわけではなく、その弥縫や隠蔽が図られた。第四に、これらの人物群の名指しには内地と朝鮮の間に時期的連動性と史的文脈の類似性は認められるが、それぞれは内地農政、朝鮮農政という別個の状況と活動の所産であった。また最後に述べ添えておきたいのは、内地にしる植民地にしろ、農業・農民と「式典」、特に大札との、観念レベルではなく、現場レベルすなわち農政のレベルでの関係性について論じた研究が殆んど見られないという点である。この点からも本稿の意義を見出せよう。

5. 樺太農業・農民史の現状と課題

竹野学が指摘するように、植民地史研究の中でも樺太史研究は立ち遅れている。それでも1990年代以降は、対象領域の拡大や資料基盤の充実に伴って、各分野での研究が進展・多様化している(竹野, 2008)。農業史の分野でも、北大植民学派⁽⁷⁾以来の樺太農業史観を払拭する竹野(2001)の研究を始めとして進展が認められる。しかし、農民運動史、農民教育史といった分野の研究は未開と言わざるを得ない。このことは次のことから示されよう。モー

リス=スズキ(2002)は樺太(農業)移民像として、単純なアメリカン・ドリーム的な像を結んでいる。その一方で、三木(2008)は悲壮感を抱いて離郷・渡島する移民像を結んでいる。この二つの移民像は一見矛盾している。この相違は何に基づくのか。

まずモーリス=スズキであるが、検討する限りこの記述は本庄陸男や寒川光太郎などの当時を知る作家の作品内記述を基にしている。「実態」の考察抜きに、表象から移民像を結ぶというこの方法自体首肯し得ないものであるが、これはまた同時に移民像をめぐる実証的研究の不足を示すものでもある。三木の記述の根拠は、三木自身の研究(三木, 2003)に求められる。三木は当時発行されたあるパンフレットから農業移民のライフヒストリー分析を行なった。このパンフレットとは『樺太農家の苦心談』(樺太庁農林部, 1929b)であり、ここに登場する10名の人物は、本稿が対象とする「篤農家」と名指された人物群である。しかし、三木は分析において、まったくこの点を加味していない。もちろん、三木の関心は「移民」の過程にあるのであり、渡島後の社会や生活にはないし、これらの人物群は「篤農家」として渡島したわけでもないので、この点から三木の研究自体を批判する必要はないであろう。また竹野(2001)は資料のひとつとして『農家経済調査』(樺太庁殖民課, 1933)を用いている。この調査の中では、サンプルとしての一般的樺太農家だけではなく、特別に節を設けて樺太篤農家の経営データも記載されているのだが竹野はこれにふれていない。竹野の関心は樺太農業の一般的情况にあり、特別なカテゴリーに類する農家の経営状態を顧みる必要は無かったからである。三木(2006)と竹野(2001)は樺太篤農家について若干の言及をしてはいるが、ごく簡潔であり樺太農政上の位置づけについて十分な考察はなされておらず、近代天皇制との関係性までは視野に入っていない。三木や竹野が不問に付したこの「篤農家」という特別なカテゴリーから、樺太移民社会史および農業史にアプローチするのが樺太史研究における本稿の位置であるといえる。

6. 樺太と皇族

樺太に関連した皇室イベントは皇太子行啓と大札だけではなかった。そのほかの皇室と樺太との関連を示すことにより、樺太における皇太子行啓と大札の位置を確認する。

最も早い樺太と皇室事業の接点は、1912年の明治

天皇大喪に際しての「御下賜金」であった（樺太庁、1936）。

大日本農会は1881年の設立時にその最高職である会頭に北白川宮能久親王を迎えて以来、現代にいたるまで最高職には常に皇族を迎えている。そして1894年から「農事功績者」への表彰事業を開始する。戦争によって中断される1941年までに、国内外の10,240名が受賞している。樺太からは、佐藤唯吉(1919年)、須賀清次郎(1928年)ら4名が表彰されている。1919年は、関東州と満州からも初めて表彰者が出たほか、台湾の漢族、朝鮮の朝鮮人からも初めて表彰者が出た年であった（大日本農会、2001）。

行啓については、皇太子裕仁(1925年)を皮切りに、7名の皇族が1936年までに行なっている。その後の戦時体制においても、東久邇宮稔彦王、昌徳宮李垠王などが行啓を重ねており(ГАСО, Ф.2н, Оп.3, Д.12)、1925年の皇太子行啓、1928年の大礼と昭和天皇中心の皇室イベントが続いた後に定期的な各皇族による樺太行啓が始まったことが確認できる。

7. 昭和の大礼の中の植民地

昭和の大礼およびその関連事業を本稿では「大礼事業」と呼ぶこととする。近代天皇制の一環であるこの大礼事業を樺太農政がいかに独自に樺太で展開させたのかを明らかにするのが、本稿の課題の一つである。しかし、そのためにはそもそも中央政府がこの大礼事業をどのように意味づけていたのかという点を検討しなければならない。

昭和の大礼とは簡潔に述べれば、1926年の大正天皇崩御を受け踐祚した昭和天皇の即位礼である。『昭和の大礼要録』（以下、『要録』）（内閣大礼記念編纂委員会、1931）によれば、即位礼自体は、1928年11月10日に京都御所にて行なわれ、引き続き諸儀を済ませた後の14日に大嘗祭が行なわれた。このため昭和天皇は6日に幸し、27日に皇居へと還幸した。

大礼事業の中で、樺太篤農家事業と関連するのはその中の恩典褒賞「特例銀杯下賜」と「移植民功労者表彰」である。またこれらの事業の意図を明確にするために、後者と対にされていた事業である「社会事業功労者表彰」についても詳解しておく⁽⁸⁾。

「特例銀杯」の対象者は「孝子にして且節婦」17名、「孝子」15名、「節婦」9名、「忠僕或は忠婢」8名、「実業に精励」2名、「公衆の利益」49名であるが、樺太も含めて「外地」の者や、農業に関与する者で顕彰された者がいるのは、「公衆の利益」のみである。ま

た、「公衆の利益」以外の項目は明らかに儒教的な徳目に沿ったものである一方で、「公衆の利益」の内実は些か不明確であるから、この点を明確にする必要があろう。

地域別の内訳を「所在地」と「活動地」に分けて表-1に示した。「所在地」については、「不明」の10名を除くと3分の2が内地である。しかし、その一方で「活動地」については逆に3分の2が外地なのである。また受賞者49名のうちの4分の1にあたる12名が漢族・朝鮮人、さらに1名が台湾少数民族と判断できる。受賞理由も多様であり、たとえば樺太の4名については、教育（佐々木時造）、農業（須賀清次郎）、土木建築（高山小枝丸）、水産業（保知清吉）となっている。

以上から、「特例銀杯」（公衆の利益）は主に外地で活動する日本人や、植民地政府に協力的な外地の被支配民族を重点的に表彰する姿勢が認められるのである⁽⁹⁾。

次に、「移植民功労者表彰」・「社会事業功労者表彰」の検証に移る。実のところ、本稿が依拠している『要録』にはこの二つの表彰に関する記載はない。しかし、樺太篤農家自身も、また樺太現地メディアもこの表彰が大礼に関連したものだとして認識していたのは明らかなのである⁽¹⁰⁾。したがって本稿では、この二つの表彰事業が、少なくとも当事者たちにとって大礼と関連付けられていたという意味で大礼の一環とみなす。

さて、表-1のごとく、「特例銀杯」で指摘したことがこの二つの表彰事業ではより明瞭になっている。漢族・朝鮮人・少数民族の名前が双方に見当たらない一方で、「社会事業功労者」には北海道アイヌの研究・教育に貢献したジョン・パチェラーのような欧米人が見受けられる。さらに、「特例銀杯」の例から類推するに、所在地が内地の地名で記載されていても活動地は外地である可能性は極めて高い。以上を鑑みるに、「社会事業功労者」は内地で活動した日本人・欧米人を、「移植民功労者」は外地へ進出した日本人を対象としていると判断できるのである。樺太の場合、後者の対象となった4名はすべてその後篤農家と称せられる人物たちであり、内地から樺太へ渡り入殖した人々であった。

かくして大礼事業において、内地／外地、日本人・欧米人／被支配民族は明瞭に意識・区別されており、さらにこの区別は小森（2001）が指摘した「日本型植民地主義」の「文明／野蛮」観とも一致していると言える。ここで取り上げた大礼の顕彰事業は、そ

表-1 昭和の大礼における顕彰者内訳

<地域別>		特例銀杯		移植	社会	<民族別>	特例 銀杯	移植	社会
		所在	活動	所在	所在				
内地		27	13	18	119	日本人	36	37	109
外地	樺太	2	4	4	0	朝鮮人	9	0	0
	朝鮮	8	16	1	0	漢族	1	0	0
	台湾	2	2	1	0	朝鮮人或漢族	2	0	0
	大陸中国	0	8	8	0	少数民族	1	0	0
	その他	0	2	5	0	欧米人	0	0	10
	小計	12	32	19	0	小計	13	0	10
不明		10	4	0	0	合計	49	37	119
合計		49	49	37	119				

出所) 内閣大礼記念編纂委員会(1931)、『官報』(1928年11月22日付[号外]、同23日付、同29日付、同30日付、同12月10日付、同29日付)より筆者作成。

注1) 「特例銀杯」とは「公衆の利益を興したるに依る」「特例銀杯」授与者、「移植」とは「移植民功労者表彰」受賞者、「社会」とは「社会事業功労者表彰」受賞者、「所在」は受賞者の所在地、「活動」は活動地をさす。

注2) 「特例銀杯」の「大陸中国」とは具体的には「満洲」「関東州」。

注3) 「特例銀杯」の「その他」2名のうち、フィリピン(1)、海外移住者支援(1)。

注4) 「不明」とは、名前に添え書きされる住所の部分に歟などが記載され、かつ受賞理由からも判断できない場合。

注5) 「移植」の「大陸中国」は、奉天(1)、牛莊(1)、長沙(1)、北京(1)、吉林(1)、済南(1)、鉄嶺(1)、関東州(1)。

注6) 「移植」の「その他」は、バタビヤ(1)、パウルー(1)、ペルー(1)、アルゼンチン(2)。

の典型的な顕われであり、具体的に言えば日本人の外地進出を積極的に称揚する植民地主義の顕現であったと理解できるのである。そして、ここで樺太は完全に外地として扱われていた。

大礼の大嘗祭に供される米・粟など(庭積機代物)を生産する農民は「正奉耕者」と呼ばれ、内地道府県、朝鮮、台湾、関東州、南洋、そして樺太から計111名が選ばれた。『要録』には樺太からは齋藤政次が「精粟」を献納したという記録がある⁽¹⁾。このように大礼においては内地の農業だけではなく外地の農業も「式典」に結び付けられたのである。

8. 樺太農政における「篤農家」

では、樺太では「篤農家」はどのようにして、生まれたのであろうか？

領有2年後の1907年に総合行政機関である樺太庁が設置され、農水省管轄の内地農政から独立した樺太農政が始まった。1920年代中葉には樺太は帝国内の人口・食糧問題の解決地として位置づけられた。朝鮮・台湾のような投資型植民地とは異なる移住型植民地としての役割を樺太庁も自認し、農業移民政策を拓殖の根幹としたのであった(竹野、2000)。

「篤農家」という言葉は、大礼以前からすでに樺太のメディアには現われていた。各種の顕彰事業自体が「篤農家」という言葉を使っていないにも関わらず、メディアは用いており、この時期には樺太でもこの言葉がある程度人口に膾炙していたとかがえる⁽²⁾。

大礼から間もない1929年の1・2月に「樺太庁殖民課農畜産大講演会」が行なわれ、3名の樺太農家が島内を講演して回った。同年6月にはこの巡回講演会の内容が『篤農家講演集』(以下、『講演集』)として刊行される。この「緒言」には、「本編篤農家講演集は昭和三年度島内篤農者として表彰を受けた佐久間喜四郎氏、齋藤政次氏、的場岩太郎氏の諸氏」という表現がある。また本文によれば須賀清次郎も講師に選ばれてはいたが、病床にあったため参加できなかったという。この4名は大礼における「特例銀杯」「移植民功労者」「正奉耕者」の対象者である。そして、同年8月には「樺太農家の苦心談」(以下、『苦心談』)が刊行され、10名の樺太農家が紹介される。このパンフレットの「序」には、「篤農家」なる表現は現れていない。しかし、時を置いて1933年に樺太農政が作成した調査報告書『農家経済調査』には、前述のように1929年度の「篤農家」の経営データが掲載されている。この「篤農家」10名と『苦心談』の10名とは完全に一致する。

かくして、1928年の大礼を契機とした上記の樺太篤農家事業を通して、これらの既存人物が樺太農政により独自に「篤農家」と名指され生み出されたのであった。(表-2)

メディアについてみると、1931年には雑誌『樺太』に佐久間、齋藤、須賀らのインタビュー記事が現われるようになる。『樺太日日新聞』に目を向けると、篤農家に関する記事は、1928年に8件、29年に12件、30年に2件となり、その後はほとんど見られなくなっ

表－２ 樺太篤農家一覧

名前	行啓	特銀	移功	正耕	農会	樺太篤農家事業			家族数	従業者数	耕地 [ha]	農外所得	牛 [頭]	馬 [頭]
						講演	苦心	調査						
須賀清次郎	○	○	○	○	○	△	○	○	11	8	17.90	0.36	7	2
佐久間喜四郎	○		○			○	○	○	4	4	23.06	0.10	8	2
的場岩太郎	○		○			○	○	○	7	4	8.80	0.05	9	1
齋藤政次				○		○	○	○	10	3	12.50	0.50	12	1
塩澤広吉	○		○				○	○	1	1	5.40	0.00	3	1
大堀要八							○	○	9	2	7.75	0.32	0	3
藤本栄吉							○	○	3	4	6.80	0.03	0	2
吉田清五郎							○	○	7	2	4.50	0.19	0	2
布村伊次郎							○	○	4	2	4.60	0.27	0	1
三輪栄正							○	○	2	2	9.55	0.00	0	2

出所) 樺太庁農林部(1929a)、樺太庁農林部(1929b)、樺太庁殖民課(1933)、『樺太日日新聞』(1928年2月16日号、同10月7日号、1929年1月11日号、1941年10月21日号)より筆者作成。

注1) 「行啓」=1925年の皇太子裕仁行啓時の拝謁者、「特銀」=昭和の大礼の「特別銀杯」授与者、「移功」=昭和の大礼の「移植民功労者」顕彰者、「正耕」=昭和の大礼の「正奉耕者」、「農会」=大日本農会による顕彰者(1928年)、「講演」=1929年の樺太庁主催の大畜産講演会に講師として参加、「苦心」=『樺太農家の苦心談』に登場、「調査」=『農家経済調査』に「篤農家」として、1929年時の経営データが掲載。

注2) 須賀清次郎も講師として選ばれていたが、病床に伏せたため講演集には名前は残っていない。

注3) 「農外所得」は所得にしめる農畜産業以外の所得の占める割合をさす。

てしまう。樺太で「篤農家」という言葉が取りざたされたのは、1928－31年の間と言えるのである⁽¹³⁾。

樺太篤農家事業が1928・29年を、メディアへの露出が1928－31年あたりをピークとするならば、これらの時期は樺太農政および樺太農業にとってどのような時期であったのであろうか？ この点を検証し、樺太農政にとっての「篤農家」の位置づけを明らかにする。

1907年の樺太庁設置後、1912年に樺太農政は正式な農業移民制度を開始する。その後、改正を幾度か重ねながら、1928年に集団移民制度と自由移民制度の併用という形で固定化させ、1932年には集団移民制度の対象を島内出身者にも拡大する。そして翌33年には農業移民事業自体の募集宣伝を中止してしまう。一方、1932年の年末から雑誌『樺太』の誌面上で「樺太農業論争」⁽¹⁴⁾が繰り広げられ、メディア上に樺太農政担当者や樺太庁中央試験所のスタッフらの発言が活発に現われるようになる。そして、1934年には拓殖計画に伴い「樺太農法経営大体標準」(以下、「標準」)、つまりは農家経営モデルが樺太農政によって画定されることとなる。ここから指摘できるのは、件の1928年を樺太農政の転換期とみなせるのではないかということである。すなわち、移民制度の調整から、経営モデルの調整への転換である。これを実証するために、数量的なデータに目を向けよう。

まず、1928年以前の農政パンフレットを検討する。1923年には『樺太之産業』、1925年には『樺太の農業』

が刊行される。双方に農家の経営データが掲載されている。しかし、この二つの間には大きな隔たりがあるのである。たとえば経営面積を比較すると前者が3.7haであるのに対して、後者が8.8haなのである。わずか2年間で島内の1戸あたりの平均経営面積が2倍以上に増加したなどと考えるには無理があるし、そもそも統計からいっても後者が純然たる平均数値であるとはみなせない。むしろ、ほかの項目を検討しても「標準」で設定された数値に近いと言えるのである。つまり、1925年の段階である程度、理想的な樺太農業経営像が樺太農政内部に形成され始めていたのであり、また同時にそれを体現するような実例も樺太内に実際に生まれ始めており、『樺太の農業』の数値は模範的な農家から得た調査結果であったと推測できる。北大植民学派の高倉新一郎は戦後に出版された『北海道拓殖史』において樺太農業を総括する文章の中で、「樺太の農業は、領有当初から始まったが、最初から真面目な農業者は少なかった。漁業或は商業の片手間に農業を営むか、農業で自家食料を得て雑業に従ふものが多かった。(中略) 農を専業とする農家と農村が出現したのは昭和三年以後の事に過ぎない」(高倉、1947、293頁)と述べている。高倉がここであげている画期「昭和三年」はまさに1928年なのである。

では、樺太篤農家の経営は、「標準」に影響を与えることになったのであろうか。この点を、「標準」に示されたモデルと『農家経済調査』の中の篤農家経営データを比較することで検証する。「標準」で示さ

れたのは端的に言えば、食料・飼料・肥料を自給する有畜(牛)家族経営専業農家モデルであった。樺太篤農家10戸のデータを比較すると各項目についてバラつきが多いものの、中核的な篤農家5名については有畜(牛)農業を実現していることと、耕作面積については6名の篤農家が「標準」(7.5ha)を凌駕していることを指摘できる。樺太農政は樺太篤農家を基にして「標準」のモデルを構築したのではなく、自身の論理に沿ってモデルを構築し、その際に樺太篤農家のデータを成功例として部分的に参照したと考えられる。また完全に参照するには篤農家間の経営にバラつきが多すぎる。ただし、1929年の「篤農家」調査に大札に無関係な5名が加えられている点を鑑みるに、1929年時点では篤農家の経営データを参照しようとしていた意図はうかがえるのである。

領有後、露領時代のロシア系住民の大半は本国送還されていたため、樺太農政はまず農業移民の招来を重視する必要があった。しかしやがて、農業移民の定着という問題を重視する必要が生じてきたのである。1928年はこの転換期であったと言えるであろう。樺太農政は定着の成功事例を内外に示す必要性に迫られていたのである。そして、樺太篤農家は成功事例として、樺太農業の一里塚としての役割を担わされたし、またそれ以上の役割は期待されなかったのである。このことは、1930年代に入り官民で農業経営モデルが議論される一方で、その議論の中で彼らが参照項にほとんどされなかったことから理解できる。つまり、樺太農政にとって、樺太篤農家とは、内においては経営モデル構築のための間接的根拠、外に向かっては内実を不問にした形での樺太農業の成功事例としての位置づけを与えられていたと言えよう。しかし、このことは1930年代の動向と結び付けてこそ言い得る見解であり、1930年代の樺太農政にとっての位置づけとも言える。1928年のその段階での樺太篤農家の位置づけは、むしろ近代天皇制との繋累の中に見出されるであろう。

9. 樺太農政と近代天皇制の繋累のロジック

樺太農政は、いかに、なぜ、近代天皇制と繋累を持ったのか？

この点を『講演集』『苦心談』の中の篤農家たちの発言から検討する。ただし、これらを単純に彼らの生の語りとして扱うことはできない。全編樺太農政による創作という極論は退けるとしても、編集に関

わっている以上、ここには樺太農政にとっての「篤農家」像が既存人物を用いて間接的に提示されようとしている意図を認めないわけにはいかない。

検討に際して注目しておきたいのが、昭和天皇が有していた二つの個性である。ひとつは「樺太行啓」をした天皇、もうひとつは「田植」をする天皇⁽¹⁵⁾という個性である。

第一の個性である1925年の行啓と1928年の大札とは常に結び付けられた。

畏くも皇太子殿下本島行啓の砌には樺太廳で奉拝の榮譽を賜り御大典には移殖民事業功勞者として内務大臣から表彰状及銀牌を授與せられ今では皇恩の無窮なるに唯々感泣して居る次第であります。
—佐久間(『苦心談』、11頁)

このように、大札での顕彰は行啓とそれに際した謁見とを再度思い起こさせる。これは謁見した農家と大札で顕彰された農家とが重なっているからである(表-2参照)。

では第二の個性「田植」は樺太篤農家にどのような意味を持ったか。

最後に最も有難く力強い事は 聖上陛下に於かせられましては御踐祚早々御自ら稲を御試作なされ我々農民へ範を垂れ給ふた事であります從來農民を土百姓等と嘲笑した者共は顔色がない筈であります斯の如き期難い聖上陛下を戴き又た今回の如き長官閣下の思召と謂い有難涙が流れるのであります。吾々農民は自他共に大いに努力し御高恩の萬分の一に報ひ奉らんことを希望して止まぬ次第であります。
—齋藤(『講演集』、23頁)

もちろん、この点は樺太以外の地域にも共通し得る点ではある。しかし、樺太の特殊な事情を拾い直して、解釈する必要がある。すでに述べたように当初樺太には農村など存在せず、また内地の農法さえすんなりと移植できるわけではなかった。そういうことから考えれば篤農家とは前例のない樺太の農村と農業とを作り上げた人物群だったのである。彼らの多くは村内の要職を務めるたたき上げの指導者でもあった。行啓(1925年)―田植(1927年)―大札(1928年)、という一連の流れを彼らの視点から捉えなおしてみよう。行啓時に彼らは農民として皇太子と謁見を許され、その踐祚後には国家の絶対的權威である天皇が自ら田植をしたことを通じて、彼らの生業である農業が天皇によって顧みられる価値のあるものだと感得した。そして大札において改めて彼らは天皇により樺太の農民として「見られた」のである。艱難辛苦に満ちた血と汗のにじむ樺太農業は、

この1928年に改めて、天皇の視界に入る価値のあるものとして顕現させられたのである。

大嘗祭に際しての「正奉耕者」はまさに古代王権の儀礼である「食国」⁽¹⁶⁾になぞらえられよう。しかし、樺太篤農家はおろか、樺太農政官僚さえ「食国」の「伝統」を関知し連想し得るかは定かではない。けれども、「食国」儀礼はそうした「伝統性」が意識されなくとも、象徴的な意味を持ちえるであろう。樺太は稲作不可能地域であり、大札において米を献穀できなかったのは樺太のみであった。原田（1993）は近世までの日本社会において稲作の可否が「日本」の領域性の指標となっていたとする。もしこの感覚が樺太においても維持されていたとするならば、稲作不可能地域ゆえに米を献穀できなかったという事実は強烈なるナショナル・アイデンティティの疎外を引き起こすであろう。しかし一方で、粟であれ大札という極めて重要な天皇儀礼に樺太の農産物を献穀したということは、樺太農業もまた日本農業であるという認識を作り出し、その疎外を克服するのである。

こうした行啓や正奉耕者、大札での顕彰といった経験は個人的なものとして閉じ込められたものではなかった。齋藤は正奉耕者に選ばれたときのことを次のように回想している。

私の粟の出来は樺太約五萬の農民の不名誉であり農民の不名誉は全島民の不面目なのであります。實に私の責任は大變なものでありました心の小さい私は若しも萬一不出來の時は夜逃げするか切腹し様かと思つた位であります

—齋藤（『講演集』、21頁）

樺太農民のみならず樺太島民全体を代表して正奉耕者を体験するという感覚を篤農家自身が有していたのである。メディアによる報道なども彼を樺太農民および樺太島民の代表であるかのように扱った。ここに、大札という「式典」を通じて天皇と篤農家に繋累が生まれ、さらに国家と農民に繋累が生まれるというロジックが成り立つのである。

次に問うべきは、その繋累が、なぜ必要だったのかという点である。樺太篤農家に共通するのは精神主義である。樺太農政は確かに篤農家という成功事例を得たのであるが、超人的な努力が必要になるのであれば、その精神主義を安定的に保障してくれるようなイデオロギー、言わば拓殖イデオロギーが必要とされた。たとえば、主食問題である。樺太農政は樺太農家が主食を米から燕麦や馬鈴薯といった自給作物に転換させることに腐心し続け、1920年代中葉から見られるようになったそうした米食撤廃論は、

ナショナル・アイデンティティに訴えかけたり、文化論を立ち上げる形でこの問題を解決しようとした（中山、2008）。一方、樺太篤農家の中にも、非米食を説く者たちがいたが、彼らの精励の根拠は家運の再興であつたり信仰心であつたりと個人的でバラつきがあつた。

また農業への動機にもバラつきがあつた。

私が故郷に於て如何に働きましても到底一家を起す見込みがないと存じましたので十ヶ年北海道出稼のことを父に嘆願致しましたが、然し父は此の願を許して呉れませんでした。（中略）占領後間もないことであるから何か仕事があるだろうと考へまして四月五日小樽出帆の（樺太行きの引用者）船に身を委ねたのであります。（中略）何時迄人に使はれて居ても果てしがないと考へまして（中略）米、味噌と農具種子を買ひ手井澤に轉住しました。

—佐久間（『苦心談』、7-8頁）

成功事例である樺太篤農家さえ、渡島後に偶然的に就農し、その結果として専農化し得たに過ぎないのである。「満洲」の試験移民団のように内地で特別に教育・訓練を施されたり、表面上であれ帝国のためにと意気込んで海を渡ったりしていたわけではなかった（工藤、1940）。従って、樺太農政にとって篤農家は二面性を有していた。樺太農業の成功事例であると同時に、精神面では偶然的で不十分であった。樺太農政は就農から精神主義まで、必然的であるような方途を導かなければならなかった。この時点で樺太農政は自前の農民養成機関やイデオログを持ってはいなかった。そのため、大札は絶好の機会となつたと言えよう。樺太農政は成功事例である樺太篤農家を近代天皇制と結合させ、彼らの存在を喧伝したのである。樺太篤農家の精神主義には普遍性というものが無かった。しかし、国民国家において、国民ほど普遍性を持つ名指しはない。彼らを天皇儀礼と結びつけることで、あたかも彼らの就農・営農と言う私的行為が、拓殖・開拓といった公的なものであるかのように偽装を施したのである。彼らは見事に本分を果たした国民として人々の前に引き出され、ほかの国民にも同様の刻苦勉勵を要求する根拠とされたのである。

「之れ嚮て一身一家の策を樹てるのみならず、帝國領土の開拓進展に貢献するものにして、樺太の開拓は即ち數十萬の生靈と數十億の國帑とを犠牲に供したる日露戦役をして始めて意義あらしむるものと謂うべし」（樺太庁拓殖部、1923、6頁）といった国家事業たる拓殖と私的就農営農とを国民観念を媒介

に結合させ、動員の根拠とする拓殖イデオロギーは、さらに「式典」を介在させることでより説得力を帯びることとなる。

ただし1930年代に入ると、樺太農政の関心は、既存人物から育成人物へ、またメディアの関心も、樺太篤農家の経験談よりも、1929年に統合・設立された樺太庁中央試験所のスタッフを始めとした植民地エリートの科学的言説へとシフトして行ったのであった。

「標準」が策定される前年の1933年に提出された樺太拓殖調査委員会の答申書と説明書の中では「須ラク島民ノ拓殖精神ヲ振興シテ拓殖事業ノ大成ヲ期スルコト肝要ナリトス」として拓殖イデオロギーの重要性が強調されているし、「敬神崇祖ノ美風ハ實ニ拓殖精神ノ基調ニシテ」（樺太拓殖調査委員会第一部委員、1933、14、72頁）というような文言は、同じく1930年代に内地や朝鮮において農村に這い入ろうとしていた天皇制イデオロギーを彷彿とさせる。また、この拓殖計画によって各地に設立された「興農会」は「樺太拓殖道場」を行政の完全な補助のもと経営するようになる。ある拓殖農場では町村長の推薦を受けた15歳から27歳の青年28名の修練生が共同生活を送り、宮城遙拝、国旗掲揚、神社参拝、誓詞暗唱などの国家主義的儀礼が日課として行なわれていた。そして誓詞には「農民道」「殖産報國」といった言葉も見られた（松尾、1939）。

こうした動きの中で、樺太農政における樺太篤農家たちの位置づけは樺太農業の一里塚以上のものにはなり得なかった。竹野（2005）や中山（2008）が指摘する如く、1934年以降、官製の経営モデルと官製の精神主義や拓殖イデオロギーが現われ、それらを体現するべく育成された農村青年が樺太農政と農業の主軸となっていくと期待されたからである⁽¹⁷⁾。

10. 結論

本稿の課題は、第一に、樺太農政が樺太篤農家事業を通じて近代天皇制をどのように利用したのかという点を事象レベルで明らかにすることであった。1928年に樺太農政は転換期を迎えていた。移民制度の調整から、経営モデルの調整への転換を図ろうとしていた。そして1928年までにはすでにある程度の樺太農家の成功事例が生まれており、樺太農政はこれら既存人物の一部を表彰事業や正奉耕者の形で大礼と結びつけた。その後、改めて「篤農家」と名指し、成功事例として喧伝したのである。樺太の農業と近

代天皇制とは、篤農家と大礼とを媒介に結びつけたのである。樺太農政は樺太篤農家が成功事例であること自体には満足していたが、その経営内容と精神面には満足してはいなかった。なぜならば、1928年の時点で1934年の「標準」に体现される経営モデルの腹案を漠然としてであれ、すでに有しており、それと樺太篤農家の経営実態の間には隔たりがあったからである。また樺太農政のモデルを実現するには精神主義が前提とされ、その普遍的な確立が要求された。そして用いられたのが、国民という普遍性であった。樺太農政は、樺太篤農家を「行啓」「式典」と結びつけることで拓殖という国家事業に本分を果たした国民として一般樺太島民の前に顕現させ、樺太農民に拓殖イデオロギーを受容させる根拠を作り出した。樺太農政は大礼に対して、単なる国民統合以上のより現場的な利用価値を認めていたのである。

第二の課題は、樺太の篤農家事業において、近代天皇制とのあいだにどのような繋累のロジックがなぜ用いられたのかを論理レベルで明らかにすることであった。樺太農政は大礼に現われた天皇を、篤農家たちを農民として「見る」天皇として演出した。「特例銀杯」「移植民功労者」「正奉耕者」、これらのいずれも天皇が篤農家を農民として「見た」ことの所産と理解させようとした。樺太はいまだ農民としてのアイデンティティが揺らぎ明滅する空間であった。しかし、天皇という絶対的権威によって「見られた」ことによりそのアイデンティティは安定化する。いわば天皇の「視界」に入ることにより、農民としての自己が認証されるのである。そして樺太農政はこの繋累を篤農家のみに占有させるのではなく、樺太農民と名指された人々にも、メディアなどを通じてひろく共有させようと図った。樺太篤農家事業とは、成功事例の喧伝であるだけでなく、農民として天皇に「見られる」体験を共有させる試みでもあったのである。天皇に農民として「見られる」ことにより、樺太農民に自らが農民かつ国民であるのだと意識させ、国民の本分を果たすべく自発的に拓殖に参加するように期待したのである。

内地や植民地朝鮮の農政が、イデオロギーによって異民族支配の正当化や地主支配の隠蔽を図ろうとしたように、樺太植民地農政は拓殖イデオロギーを構築せんとしていたのである。樺太篤農家事業とは、その試みの一つであった。農政の関心が既存人物から育成人物へシフトする点では、内地、朝鮮と類似しているが、その時期や状況はやはり異なる。その基底には、階級間ないし民族間の緊張関係の調整・

隠蔽ではなく、農政の重要課題として「拓殖」があったのである。樺太を出稼地から健全な開拓地へ育成することが樺太農政の課題であったのである。

拓殖イデオロギーの喚起を図った樺太農政は、「行啓」や「式典」で生まれた樺太篤農家と天皇との間の繋累を強調し、その繋累の一方を樺太農民・農業全般へ、また一方を国家へと伸ばそうとした。その繋累の枢要は、天皇に「国民」かつ「農民」として「見られる」ことにあり、その意義は私的就農営農の成功者を国家的な拓殖事業への貢献者に偽装することであったのである。

注

- (1) 本稿ではこの語を「連関」の意で用いる。支配—被支配関係であるはずの天皇—国民（臣民）関係はしばしば親子関係に擬され、国民間の関係、そして民族間の関係も兄弟関係のように擬され、繋ぎ累ねられようとした。「繋累」の語は拘束性の他に親族関係も含意するので、上記のような近代天皇制の特性をふまえ、本稿ではあえてこの語を用いた。
- (2) 本稿では形式的に、大日本帝国憲法発布以前の領土を「内地」、それ以降に編入された植民地やそのほかの勢力圏を「外地」と呼ぶ。
- (3) 一般の内地農業・農政史では、たとえば井上（1972）が指摘しているように、1921年や1936年周辺が小作爭議激化の時期として挙げられる。しかし、赤司は「地主・小作関係が従来の温情主義的關係から対抗關係に変化し、小作爭議が激化する傾向にあった」（赤司、1973、118-119頁）として、この時期の「篤農」の実態を分析している。
- (4) ただし農村経済更生運動においても再び「篤農家」という語が現れる。たとえば、1932・33年には大日本聯合青年団が「全国青年篤農家懇談会」を開催している。この会合は農村経済更生運動の一環であり、内地各府県、北海道、樺太から30歳までの134名の「青年篤農を招集して時局に関する研究討議を遂げ、以って農村の更正に資するあらん」という名目で開催された（大日本聯合青年団、1932）。1932年大会では樺太からも1名参加しているものの、この人物は樺太篤農家の範疇には入っていないし、ここでの「篤農家」という名指しは育成人物に対するものであった。
- (5) 本稿が樺太との類似性を指摘される北海道の農政・農業を比較対象としていないのは、近代天皇制を考える上では、被支配民族による抵抗が最も強く植民地として好対照であった朝鮮などの地域との比較から樺太農政の特色を描くことが適切だと考えるからである。
- (6) 台湾でも1930年代に、日本人・漢族双方の青年を対象とした農業学校が設立されて農村の中堅人物を「皇国農民」として育成することが図られた（張、2001、199-200頁）。少数民族についても、皇民化政策の推進と共に村の「中堅人物」の養成を目的とする「農業講習所」が各地に設立された（松田、2000）。また「篤農家」という言葉も見られ、たとえば台北州農会は「青年篤農家講習」を開催している（台北州農会、1937）。
- (7) 本稿の言う「北大植民学派」とは、竹野（2003）の言う植民学における「北大学派」のことである。便宜上、このような表現を用いた。
- (8) 当時の『官報』においてこの二つの事業は常に並べて扱われていた。
- (9) 北海道や沖縄などの「内国植民地」の人間も「公衆の利益」でのみ名前が認められる。
- (10) たとえば「御大典に表彰された篤農家が講演 全島農村を行脚する 豊原からも二人参加して」（『樺太日日新聞』1929年1月11日号）など。この二人とは須賀と的場である。
- (11) ただし、樺太現地メディアでは前出の須賀も大嘗祭の機代物として馬鈴薯を「奉耕」し収穫祭を行なうと報じられている（「須賀氏奉耕馬鈴薯収穫祭執行」『樺太日日新聞』、1928年10月7日号）。これは『要録』では米・粟の献穀者しか記録されていないためであると思われる。本稿では須賀も「正奉耕者」として扱う。
- (12) たとえば、1928年2月16日の『樺太日日新聞』には「本斗支庁に於て紀元節をトシ管内篤農家を表彰 農事組合にも感状を贈る」という見出しが見られる。しかし、この際の表彰状には「篤農家」なる言葉は現われてはおらず、「右者移住以来鋭意農業に従事し斯業の改良発達を図り其の功蹟顕著にして他の模範とするに足る仍て木杯を贈呈し茲に之を表彰す」という表現があるに過ぎない。前述の大日本農会による表彰に際しても大日本農会は表彰理由として「農業上の功績功勞の顯著なる者」（大日本農会、2001、28頁）という表現を用いているに過ぎないのに樺太現地メディアは「篤農家」という表現を用いている。
- (13) ただし、メディアが取り上げたのは本稿が取り上げる10名に限っていたわけではない。また、1941年には再び「篤農家」と名指される人物群が現われ、「土の十二戦士」などと称されたが（「荊の道を克服して農村に挙るこの凱歌 全島篤農家建設の声 巡回座談会その一」『樺太日日新聞』1941年10月21日号など）、この時期の動向については、「食糧増産実行共励員」との関係なども含めて別稿に譲りたい。
- (14) 「樺太農業論争」については、竹野（2001）、竹野（2005）などに詳しい。
- (15) 昭和天皇は「田植」をした初の天皇だった（高橋、1994）。
- (16) 古代王権の服属儀礼としての「食国」と新嘗祭の関係については岡田（1970）を参照。
- (17) 篤農家のうちでその後の動向が判明しているものは限られている。前注記の「土の十二戦士」の12名のうちには佐久間と三輪のみが入っている。敗戦後の1946年2月にソ連当局が作成した南サハリンの大規模農場のリスト（ΓΑＣΟ，Φ.171，Οπ.1，Π.26）や、1949年に全国樺太連盟が作成した『樺太人物鑑』には三輪の名前しか見られない。しかし、この点は世代交代や戦時体制論を含めて考えなければならないだろう。

参考文献

- 赤司政雄、1973、篤農の実体と意義、東京教育大学農学部紀要、19
- Anderson, B. 1991, *Imagined Communities* (Rev. ed.), Verso
- 青野正明、1991、朝鮮農村の『中堅人物』、朝鮮学報、141
- 坂野潤治、2008、日本憲政史、東京大学出版会
- 大日本農会、2001、大日本農会百二十年史、大日本農会
- 大日本聯合青年団、1932、第一回全国青年篤農家大会記録、大日本聯合青年団
- Fujitani, T., 1998, *Splendid Monarchy*, University of California Press
- フジタニ、T.、1994、天皇のページェント、日本放送出版協会
- 不破和彦、1978、日露戦後における農村振興と農民教化 (II)、東北大学教育学部研究年報、26
- 浜田陽太郎、1977、農本主義のはばたき、世界教育史研究会編、農民教育史 (世界教育史大系 35)、講談社
- 原武史、2001、可視化された帝国、みすず書房
- 原田信男、1993、歴史のなかの米と肉、平凡社
- 堀和生、1976、日本帝国主義の朝鮮における農業政策、日本史研究、171
- 井上晴丸、1972、日本資本主義の発展と農業および農政 (井上晴丸著作選集 第5巻)、雄渾社
- 樺太庁殖産部編、1923、樺太之産業、樺太庁
- 樺太庁内務部殖産課編、1925、樺太の農業、樺太庁内務部殖産課
- 樺太庁農林部、1929a、篤農家講演集、樺太庁農林部
- 樺太庁農林部編、1929b、樺太農家の苦心談、樺太庁農林部
- 樺太庁殖民課、1933、農家経済調査、樺太庁殖民課
- 樺太拓殖調査委員会第一部委員、1933、樺太拓殖調査委員会答申及説明書第一部 (農業、牧畜業、植民)、北海道大学図書館北方資料室所蔵
- 樺太庁殖産部、1934、樺太農法経営大体標準、北海学園図書館所蔵
- 樺太庁編、1936、樺太庁施政三十年史、樺太庁
- 木村誠編、1949、樺太人物鑑、全国樺太連盟情報部
- 駒込武、1993、異民族支配の〈教義〉、大江志乃夫ほか編、統合と支配の論理 (近代日本と植民地 4)、岩波書店
- 小森陽一、2001、ポストコロニアル、岩波書店
- 工藤儀三郎、1940、弥栄開拓十年誌、満洲事情案内所
- 松田吉郎、2000、日本統治時代台湾の農業講習所について、現代台湾研究、20
- 松本武祝、1998、植民地権力と朝鮮農民、社会評論社
- 松尾毅、1939、拓殖道場をのぞく、樺太、11 (2)
- 三木理史、2003、農業移民に見る樺太と北海道、歴史地理学、No. 212
- 三木理史、2006、国境の植民地・樺太、塙書房
- 三木理史、2008、明治末期岩手県からの樺太出稼、蘭信三編、日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学、不二出版
- 森武磨、2005、戦間期の日本農村社会、日本経済評論社
- モーリス＝スズキ、T. (小林英里訳)、2002、植民地思想と移民、拡大するモダニティ (岩波講座 近代日本の文化史 6)、岩波書店
- 内閣大札記念編集委員会編、1931、昭和の大札要録、内閣印刷局
- 中山大將、2008、周縁におけるナショナル・アイデンティティの再生産と自然環境の差異、ソシオロジ、163
- 大門正克、1994、近代日本と農村社会、日本経済評論社
- 岡田精司、1970、古代王権の祭祀と神話、塙書房
- 朴埤相、2003、天皇制国家形成と朝鮮植民地支配、人間の科学新社
- 坂根嘉弘、1990、戦間期農地政策史研究、九州大学出版会
- 台北州農会、1937、青年篤農家講習録、台北州農会
- 高橋紘、1994、解説 創られた宮中祭祀、河井弥八著・高橋紘ほか編、昭和初期の天皇と宮中 第6巻、岩波書店
- 高倉新一郎、1947、北海道拓殖史、柏葉書院
- 竹野学、2000、人口問題と植民地、経済学研究、50 (3)
- 竹野学、2001、植民地樺太農業の実体、社会経済史学、66 (5)
- 竹野学、2003、植民地開拓と「北海道の経験」—植民学における「北大学派」一、北大百二十五年史 論文・資料編、北海道大学
- 竹野学、2005、樺太農業と植民学、札幌大学経済学部附属地域経済研究所
- 竹野学、2008、樺太、日本植民地研究会編、日本植民地研究の現状と課題、アテネ社
- 富田晶子、1981a、農村振興運動下の中堅人物の養成、朝鮮史研究会論文集、18
- 富田晶子、1981b、準戦時下朝鮮の農村振興運動、歴史評論、377
- 若林正丈、1992、一九二三年東宮台湾行啓と「内地延長主義」、大江志乃夫ほか編、帝国統治の構造 (近代日本と植民地 2)、岩波書店
- 大和和明、1982、1920年代前半期の朝鮮農民運動、歴史学研究、第502号
- 安丸良夫、2001、近代天皇像の形成、岩波書店
- 張素玢、2001、台湾の日本農業移民 (臺灣史研究論叢 6)、國史館
- 『樺太日日新聞』(1928年2月16日号、同10月7日号、1929年1月11日号、1941年10月21日号)
- 『官報』(1928年11月22日付[号外]、同23日付、同29日付、同30日付、同12月10日付、同29日付)
- ΓΑＣΟ, Φ.2 η, Ο π.3, Δ.12.
- ΓΑＣΟ, Φ.171, Ο π.1, Δ.26.
- (サハリン州国立公文書館[略称: ΓΑＣΟ]所蔵一次史料については資料番号を示した。)